

上前智祐の赤黒い点々の絵画は、彼が若い時から親しんできた職場の溶鉱炉の火の色だという。だいぶん以前にそんな話を本人からきかされたことがあった。

私はそんなせんさくにはあまり興味をもたないのだが、なんにしても彼は造船所の高い場所でクレーンの運転をしながら、眼下の炉の火をいやでも毎日ながめて暮し、彼の作品は激しい日々の労働の間に生れてきた。しかも夥しい数の作品が出来上る。

いまから十数年前のある日、彼は大きなボヘミアン・ネクタイを結んで、数枚の絵を見せるために私のアトリエを訪れた。どこかの公募展に入選したといていたが、私はそれらの絵をこっぴどくやっつけた。そして、もう二度とその変な芸術家は私の前には姿を見せないだろうと思っていた。しかし、それは間違いであって、その時以来、私は彼の中断なき訪問に悩まされねばならなかった。彼はその都度相当数の作品を抱えてくる。私は厳しくそっぽを向く。しかし、彼は遂に彼なりの鉦脈につきあつたようであった。

彼は子供のように原色の点々の絵をかき、いつしか芸術家気取りも消えうせた。そして具体グループの最古参のメンバーの一人として今日に至った。

以来、彼の絵のスタイルは常に一貫した軌道をはずれなかったようだ。しかし安易に自分のスタイルを持続したというわけではない。彼は彼なりに今日にいたるまで何回も脱皮の苦しみを味わってきた。ある時期には絵具の点々にかわって何貫目もあるマッチの軸を尠大なキャンバスに塗り込め、四人がかりでないともち運びが出来なかったこともある。そしてその度毎に彼の画境は深まっていった。

私は且って具体グループが催した「新しい絵画世界展」に於ける上前智祐の作品を、タピエが最も注目すべき作品の一つとしてとりあげたことを思い出す。

はなばなしくはないが、まちがいのない足どりで彼は一步一步自分の路を進んでゆく。近年彼の絵はいちじるしく密度が加わってきた感じである。